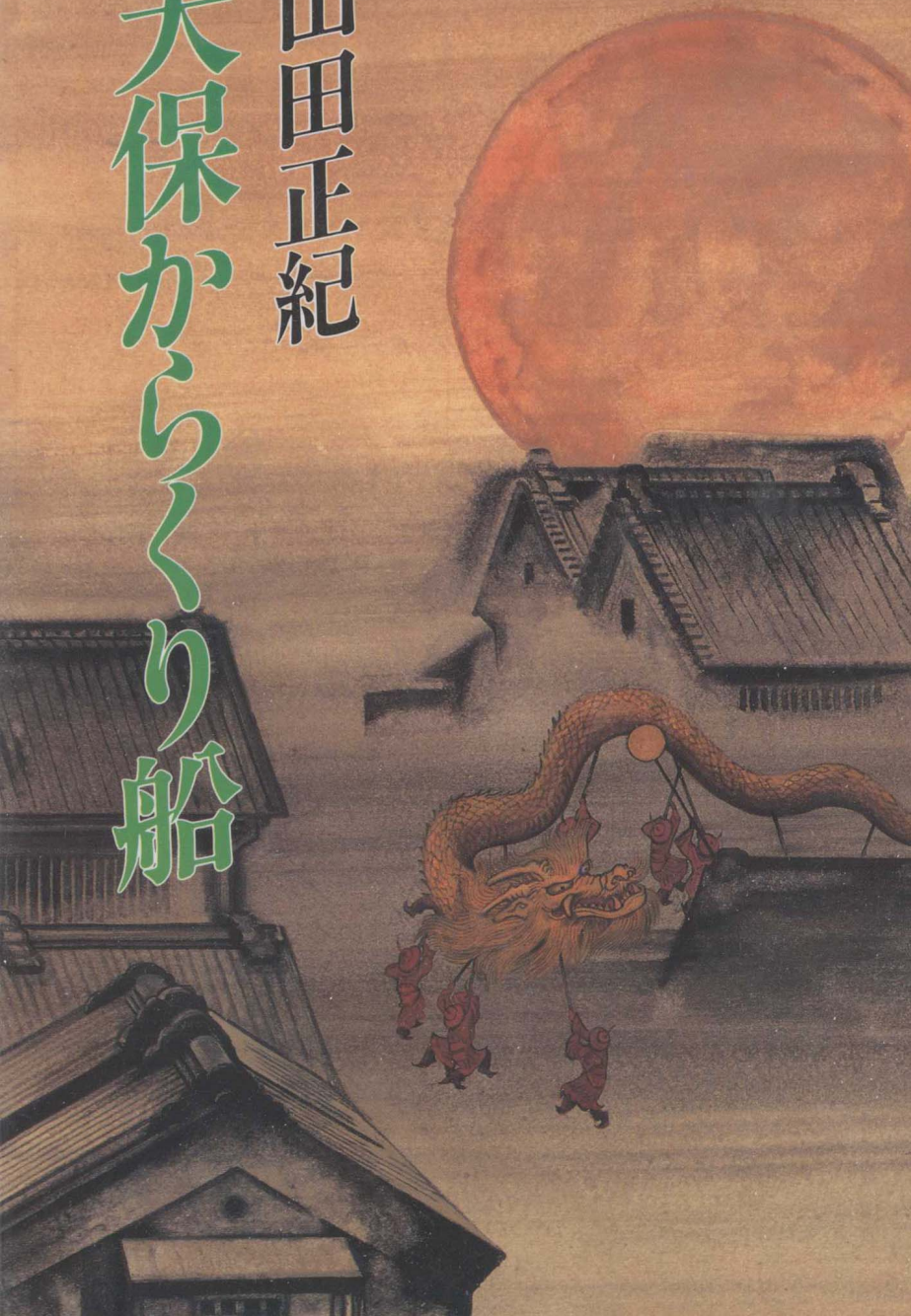


山田正紀

天保からくり船



山田正紀
天保からくり船

光風社出版

天保からくり船

一九九四年三月十日 印刷
一九九四年三月十五日 発行

著 者 山 田 正 紀

発行者 深 見 兵 吉

発行所 光 風 社 出 版

東京都文京区春日二一四一

郵便番号一一二

TEL〇三 (五八〇〇) 四四五

FAX〇三 (五八〇〇) 四四五

印刷 大 盛 印 刷

製 本 越 後 堂 製 本

◎乱丁、落丁の場合はお取り替えます

◎定価はカバーに表示してあります

© 1994 MASAKI YAMADA

Printed in Japan

ISBN4-87519-374-2 C0093

天保からくり船
目次

寛永寺炎上

7

七夕怪談・鐘ヶ淵

47

深川唐人踊り

86

大江戸天文台

123

九く十く九っ

155

永代築地芥ごみあらた改め

190

大江戸胎内道

226

江戸幻想談

261

装幀 中江 蒼

天保からくり船

寛永寺炎上

1

こともあろうに寛永寺から出火した。

東叡山円頓院。

寺域三十一万八千余坪、子院三十六坊、主要堂宇三十五……

江戸城の鬼門鎮護をあずかり、いうまでもなく將軍家代々の菩提寺でもある。

天海僧正を開基とする、この由緒ある大伽藍から出火したというのだから、火事には慣れているはずの江戸っ子も、さすがにおどろいた。

なんでも本堂のあたりに落雷があり、それが原因で出火したという。

後になって、炎につつまれた本堂の大屋根を、おびただしい数の雷獣が駆けまわっていた、という噂がとりざたされた。

この時代の人々は、落雷とともに、雷獣が落ちてきて、襖障子や柱を掻き破っていく、という

ことを信じていた。

これをあながち、とるにたらない噂だと笑うことができないのは、このころ江戸の町には不思議なことが頻発し、人々が神経質になっていたからだ。

やれ、西の空を銀色に光るものが飛んでいったとか、夜、地藏の一行がひそひそと街道を渡っていったとか、奇怪な噂にことかかず、なにかよくないことが起こる前兆ではないか、と人々を恐れおののかせていた。

そのやさきの寛永寺の出火であるから、江戸の人は、いよいよ凶事の到来かと、顔色を変えることになった。

茗荷谷の藤吉は、たまたま上野北大門町の知人を訪ねようとして、この火事に巻き込まれることになった。

上野北大門町は東叡山門前地で、広小路通りの東西両側にある。

昼の八つ（午後二時）に始まった火災は、おりからの強風にあおられ、夕七時半（午後五時）にはもう、新黒門町から仁王門前町まで焼きつくしていた。

なにぶんにも火の手が早く、飛び火はそれからそれへと拡がって、わずかなあいだに、上野かいわいはゴオゴオと噴きあがる炎につつまれた。

藤吉は世なれた四十男だが、たかをくくっていたのが災いして、いつのまにか、前後を炎にさえぎられてしまった。

——こいつはいけねえ。うかうかしてるとこちらの眉に火がつきかねねえ。

さすがに藤吉は狼狽した。

尻端折りの足袋はだし、濡れ手拭いに顔を包んで、火の粉の雨をくぐって、懸命に逃げた。なにしろ、炎と煙りに追われた人々が、なだれをうって逃げ迷っているので、思うようにさきに進むこともできない。

半狂乱で逃げまどう人々に、揉まれ、押し返され、何度も突き倒されそうになったほどだ。

「あぶねえ、あぶねえ」

藤吉はそう叫びながら、しゃにむに上野町代地に向かった。

上野町代地は火除地だし、いざとなったら和泉橋通りから神田川に飛び込むという手もある。が、逃げまどう人々にさえぎられ、なかなか思うように進めない。いつしか上野町にさまよい込んで、炎に追われるまま、摩利支天横町から三枚橋横町、穴阿彌陀横町と逃げ迷った。

おそらく御徒組屋敷のほうに渡る三枚橋の付近だろう。

ふと気がつくと、いつのまにか、まわりに人の姿がいなくなっていた。

こんなことがあるだろうか？

あれほど狂ったように逃げまどい、泣き叫んでいた人たちの姿が、ただのひとりも見えないのだ。

あいかわらず軒下から炎が噴きあげ、ときおり轟音とともに屋根が焼け落ちるが、それをべつにすれば、不思議なほどしんと静まりかえっている。

炎が夜空を焦がし、大勢の人が焼け死んでいるのが嘘のような静けさなのだ。

一瞬、藤吉は自分が夢でもみているような頼りなさを覚えた。

その場に立ちすくんだ。

「……また」

目を瞬かせた。

強風にあおられ、あかあかと炎が揺れている。その炎に映え、ちらちらと点滅するように、なにやら影がうごめいている。

目の錯覚だろうか？

藤吉にはその影がどうも生き物のように見えてならない。炎のなかを這いずり、ときには跳んで、パツと火の粉を散らす。そんな得体の知れない影が、燃えあがる炎のそこかしこに、うごめいているのだ。

気のせいかな、耳を澄ますと、なにやらヒソヒソと囁きあい、笑いあう声も聞こえてくるようではないか。

人間のはずがない。生身の人間がこんな業火にさらされ、うごめき、囁きあうことなどできようはずがない。

この時代の人間にはめずらしく、藤吉はほとんど怪談も妖怪も信じていない。若いころからの岡っ引稼業が身に染み込んで、この世のことは、いいも悪いも、しよせんは人間のしでかすことだ、とそう考えている。

そんな藤吉が、

——雷獣か。

さすがにゾツと冷水をあびせられたように感じた。

藤吉は、町同心のお供をするとき以外は、十手を持ち歩かない。もともと岡つ引風を吹かして、十手をひけらかすのが好きなほうではない。

早縄さえ持ち歩かない。いつも身につけているのは数珠ひとつ。わずかに後ずさると、腰からその数珠を引きだした。

いかにも硬そうな玉が黒光りしている。それをべつにすれば何の変哲もない数珠だ。念仏の数珠を数えるように、その数珠を指でつまぐっている。

藤吉には、この数珠がなにより心強い味方なのだ。

茗荷谷の藤吉の名のとおり、小日向の茗荷谷町の生まれではあるが、いま、そこに住んで、縄張りになっているのは神田だ。

それが茗荷谷と呼ばれるのは、茗荷を食べるように、あつさり罪を忘れる、という意味を含んでいる。

嫌われ者の多い岡つ引のなかにあつて、藤吉だけは、むやみに人を脅したり、ひつくくったりはしない。ほんとうに悪いやつには容赦しないが、そうでないかぎり、できるだけ情けをかけて、無用な罪人をつくらないようにこころがける。

いまだき、めずらしい岡つ引で、器用にやつかい事をさばいて、あつさり罪を忘れるから、いつからともなく呼ばれるようになった名が、茗荷谷の藤吉。

罪を忘れ、善根をほどこすたびに、一つまたひとつと、硬いかしの木を彫りだし、数珠の玉をつくる。

それを百八個つないで、完全な数珠にするのが、藤吉の悲願で、歳月をかさねて、ようやく玉も百個を数えるまでになった。

いわば、その数珠は、藤吉がこれまで積んできた善根のあかしで、いざというときには、なまじの十手より助けになってくれるはずだ、とそう信じ込んでいる。

ましてや、いまは、炎のなかを跳梁するあやかしのものが相手なのだから、いつにも増して、その数珠が心強いものと思われる。

いかに岡っ引であつても、妖怪まで取りしめる必要はないようなものだが、藤吉には妙に律儀なところがあつて、うろんなものは見逃しにできない。

「……」

口のなかで念仏をとなえ、数珠を指でつまぐりながら、じりじりと炎のほうに近づいていった。藤吉が近づくとつれ、炎のなかの怪しい影は、ますます活発に動くようになった。

犬ぐらいの大きさがあるようだ。もちろん、御府内広しといえども、炎のなかを這いずりまわつて、ピョンピョンと飛びまわるような、そんな犬がいるはずがない。

なにより、ひそひそと聞こえてくるその囁き声は、なにを話しているかまでは分からないが、たしかに人間の言葉であるらしい。

ときおり、しゃがれて、気味の悪い笑い声が聞こえてくる。

——とんでもねえ化け物だ。

両国の見せ物小屋を探しても、こんな声をだして笑う犬などいるはずがない。もうとつくに暮れ六つ（午後六時）は過ぎているだろう。

いつもなら暮色に閉ざされるはずの刻限だが、空を焦がす炎に、上野町一帯があかあかと照らしだされている。暗い空にはるか炎がおどつていた。

が、どうやら、いま藤吉のまえに燃えあがっている炎は、ありきたりの炎ではないようである。

うねつて、ねじれ、波たつその様子が、どうにも尋常ではない。

撥ねあがり、噴きあがるかと思えば、長い尾をひいて、宙にクルクルと旋回する。それが火の粉を散らして、はじけ、また新たな炎が噴きあがる。

炎のなかにうごめいている妖しい影もさることながら、どうやら、炎そのものが魔性をおびているようにも感じられた。

その炎にじりじりと歩を進めながら、

「人を見そこなやあがつて、はばかりながら江戸っ子だ。狐や狸に馬鹿にされるような安い面しちやあいねえ」

藤吉は手のなかでプツンと数珠の糸を切った。

そして、すばやく足を踏みかえると、数珠から玉をくりだして、そのひとつを指先で弾いた。

鍛練に鍛練を積んだ指弾だ。硬いかしの玉を指で弾いて、十発が十発、狙いたがわずかに命中させる。まさか飛び道具とまではいかないが、それでも羽目板をぶち抜くぐらいの威力はある。

どんな悪党も、この指弾をくらつて、泣きをいれない奴はいない。

その思いをこめた一撃が、炎のなかに一直線に飛び込んでいった。

火のなかにおどる影に当たった。

——やった！

藤吉が胸のなかで歓喜の声をあげたその瞬間——

炎が咆哮を発して噴きあがったのだ。そのゴオツという轟音をつんざくようにし、しゃがれた笑い声が響きわたった。

噴きあがった炎に押し返され、わつ、と藤吉は飛びすさった。

飛びすさりながらも、さすがに茗荷谷の藤吉、ひるまずに数珠から玉をくりだし、二発めを飛ばそうとしたのだが、

「……………」

そのまま呆然と立ちすくんだ。

あれほどの業火が、蠟燭の火を吹き消すように、一瞬のうちに消えてしまった。

もちろん、炎のなかをうごめていた、あの妖しい影もともに消えている。

ただ、ブスブスと白い煙りがたちのぼって残っているだけだ。

「なんてこった」

藤吉は口のなかでつぶやいた。

ただ火が消えてしまっただけなら、藤吉もこんなに呆然とはしないだろう。

激しい炎が消えて、それと入れ替わりのように、そこになんとも思いがけないものが出現した